

War, Traumatic Experiences & the Arts



2013年

11月10日(日)

13:30~17:30

京都大学人文科学研究所

4F 大会議室

John Singer Sargent, Gassed, c. Imperial War Museum

★司会&コーディネーター

田中雅一 (京都大学)

★発表者と発表タイトル

1. Rupert Cox (マンチェスター大学) + Angus Carlyle (ロンドン芸術大学) + 平松幸三 (京都大学)

“Sensing Change in Ecologies of Military Conflict”

2. Ana Carden-Coyne (マンチェスター大学)

“Trauma, Toxic Imaginaries and the Healing Arts of the First World War”

3. 福浦厚子 (滋賀大学)

“Divide and Cohesion: Patriarchal Narratives and its Implications for Female Military Personnel in Japan”

4. 井上リサ (名古屋芸術大学)

“The Post War, Disaster of the Earthquake and Silent Bodies 1945-3.11 - Studying the Independent Art Movements in the Tohoku(North East) Regions and the Trauma in the Post war and the Earthquake”

★コメントーター

Andrea De Antoni (京都大学)

酒井朋子 (東北学院大学)

★趣旨説明

戦争や紛争など、軍事活動が引き起こす社会的苦悩は20世紀以来の重要な問題であった。トラウマ概念が戦争と結びつくのは第一次世界大戦においてである。いわゆるシェルショックについての分析が、トラウマ概念を定着させていく。またPTSDはベトナム戦争以後注目される。このように考えると、20世紀は戦争の時代であるとともにトラウマの時代でもあった。したがって、戦争とトラウマの関係についてあらためて考察する価値がある。また、トラウマとアートの世界はどのような関係にあるのだろうか。症状か表現か、それとも治療か? こうした問いを念頭に本ワークショップでは、内外から、映像作家やサウンドスケープ・クリエイター、歴史家、文化人類学者、アーティストを招聘し、戦争とトラウマ、あるいはトラウマとアートとの関係について多角的な考察をすすみたい。(使用言語は英語)

★会場へのアクセス



C.R.W. Nevinson, After A Push, 1917

German Advance During Gas Attack, IWM

George Leroux, L'enfer (Hell), 1921

☆主催：京都大学人文科学研究所 全国共同利用・共同研究拠点「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」

：共同研究班「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究」(代表・田中雅一)

☆連絡先：shakti@zinbun.kyoto-u.ac.jp